
自由への招待

景仰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自由への招待

【Nコード】

N0427H

【作者名】

景仰

【あらすじ】

のらりくらり、ひょうひょうと生きてきた青年が連れ去られたのはモンスターハンターの世界だった。青年は生きるため、自分を連れ去った者を探すためにハンターになることを決意する。求める真実の先に待つものは――。青年が第一歩を踏み出す時、それは伝説の幕開けだった……

第一話―プロローグ―（前書き）

はじめまして、景仰と申し上げます。小説書くのは初めてという完全無欠の初心者です。ですがみなさんにお楽しみいただけるよう頑張りますので、どうぞこの自由への招待をよろしくお願いします。

第一話―プロローグ―

「もー、なんやねん。めんどくさいなあ」

青年は心底うんざりといった様子でぼやいた。

彼の名は明石^{アカシ} 遥^{ヨウ}。

言葉使いからも分かるように、関西圏に住むちよっぴり面倒くさがりな、それ以外はいたって普通の青年だ。

彼は今日20歳の誕生日を迎えたばかりの大学生で。いつものように講義を受け、その足でバイトに励み、ようやく帰路についたところだった。

その途中で彼は不思議な現象にみまわれる。

。突然の頭痛に、瞳を閉じて壁を支えに耐えていると誰かの声が聞こえた。

聞き覚えのない声は自分と呼んでいた。

己を苛む頭痛にイラつきながら、声のするほうに意識を向けると。

そこには、目を疑うような光景が広がっていた。

今彼がいるのは、何かの廃墟の広場のようで。先ほどまで、閑静な住宅街を自宅に向けて歩いていた彼にとってはありえないことであって。

ところどころが崩れ落ち、黒く変色した石畳は植物の浸食を許している。そんな広場の真ん中で、彼は途方にくれた。

「ごめんね」

突然に背後から響いた声に、ヨウははじかれたように振り返った。

そこには三人の子供がいた。少年が二人と、少女が一人。

少年二人はそれぞれ、白光のような白髪白眼と全てを呑み込むかのような黒髪黒目を持ち、少女は燃えるような紅髪紅眼である。

「君を呼んだのは僕たちなんだ」

話しているのは白光のような白髪白眼の少年だった。ぼけーっとそんな少年たちを見ていたヨウは、その少年の声がさ

つき自分と呼んでいた声だという事に気づいた。

「なに？ どうゆう事なん？ 自分らが俺を呼んだって？」

混乱するというのは、処理しきれない疑問に呑み込まれることをいう。

今まさに、ヨウはその状態にあった。

「そうだよ。僕たちが君を呼んだんだ。……僕たちを、助けてほしい」

「はあ？」

訝しげに返すヨウの混乱は頂点を極めていた。

自分はただの一般人であり、こんな子供にピンポイント指名を受けるような覚えはない。

それも、こんな見知らぬ地に連れてこられてまで。

「なんで俺やねん？」

「それは君が、僕たちにとっても似ているから」

「なんやそれ」

ヨウは話すうちに少しずつ冷静さを取り戻していた。

ひょうひょうと、のんびんだらり。

それがヨウのスタイル（生き方）。

のらりくらりと自分に向けられる災難をかわしながら過ごしてきた彼本来の姿が戻りつつある。

ある意味、強靱な精神力の持ち主と言えるかもしれない。

だがそれも、少年が発した次の言葉に凍りつく。

「誰よりも自由を望みながら、本当の意味でそれが叶わないことを知っている。限界を知る悲しい人」

「!!」

凶星だった。

ヨウは12のときまで超絶な問題児だった。

自分は自由だと声高に叫び、その通りに生きていた。

誰もがそうあるべきなのに、周囲の自分を見る目は恐ろしく冷たく、自分は裁かれる側だった。

そして気づいてしまった。人とはあらゆるものに縛られ、搾取されるために生きていると。

その中にわずかな幸せを見いだし、それに満足することでしか生きてはいけぬ世界であると。

呆然と立ち尽くすヨウに、少年は励ますように声をかける。

「君の世界で世界一悲しい存在だった君。だからこそ、僕の世界で世界一悲しい存在の僕は君を選んだ」

ヨウはゆっくりと少年を見据えた。

「僕らを救ってほしい。そうしたら、その先に待つ新世界を君にあげる」

その言葉を脳に刻み込むのを最後に、ヨウの意識は闇に落ちていった。

少年は倒れたヨウを見て、目を閉じる。

そしてその目をあけた時、そこにいるのは白光に輝く竜だった。

後ろに控えていた少年少女もまた、威容を放つ竜となっていた。

「僕たちは祖なる者。最果ての地で君を待つ」

三頭の竜は翼をはためかせ、飛び去った。

一人残された意識なきヨウの背に、不思議な詩が降り注ぐ。

数多の火竜を駆逐せし時

伝説はよみがえらん

数多の肉を裂き 骨を碎き 血を啜った時

彼の者はあらわれん

土を焼く者

鉄くろがねを溶かす者

水を煮立たす者

風を起こす者

木を薙ぐ者

炎を生み出す者

その者の名は
――――

その者の名は 宿命の戦い

その者の名は 避けられぬ死

喉あらば叫べ

耳あらば聞け

心あらば祈れ

ミラボレアス

天と地とを覆い尽くす

彼の者の名を

天と地とを覆い尽くす

彼の者の名を

——彼の者の名を

そして伝説が幕をあける——。

第一話―プロローグ―（後書き）

一話目はプロローグです。なんのヒネリもなくてすいません。しかしここから壮大な物語が始まる……予定です。お気づきになった点や、感想評価などはいつでもお待ちしておりますのでお気軽にどうぞ。ではまた次話で。

第二話―ある日のポッケ村―

ポッケ村。

偉大なる雪山に抱かれるように、その麓に位置する小さな村。

気候は一年を通して寒冷と言ってよく、冬は厳しい寒さと引き替えに美しい雪化粧に包まれる。

その景色目当てに訪れる観光客も少なくなく、交通の整備やさらなる安全の確保など、まだまだ発展の伸びしろを残した村である。

そして今、そのポッケ村の未来を担うであろう若いハンターが生まれようとしていた。

「さすがだなナナ。筆記テストは完璧だったぞ」

「この日のために頑張ったのです。当然なのです！」

自然の香りがする木造の建物の中、壮年の男性と少女が言葉をかわす。

時は夏、開け放たれた窓から涼やかな風が吹き込む一室は少女の発した言葉により、ほんわかした空気に満たされる。

この世界にはハンターと呼ばれる職業がある。それは最も過酷であるとともに、最も尊敬される職業でもある。

なぜなら彼らは飛竜と呼ばれる、明らかに生態系として格上のモンスターを相手取り、人々を護るためにこれを狩ることを主な仕事とするからだ。

もちろんハンターであれば誰もがそれをこなせるわけではなく、多くの犠牲を出しながらも知恵を絞り、強大な敵を打ち倒す。

そんな彼らを人々が英雄として遇するのはある意味で必然と言えた。

「よし、じゃああとは最終実技試験を残すだけになったな」

「はい！ これで私もハンターの仲間入りなのです！」

またもや室内にはわはわしたユルい空気が漂う。

紹介が遅れたが少し変わった口調の、やけにユルいこの少女こそが今まさにハンターにならんとする若き光だ。

名をナナリベリ。

十五才になったばかりながら、厳しい訓練を経て優秀な成績を残してきた新進気鋭のハンターの卵である。

百五十センチほどの小柄な体に美しい金色が映える髪を、大きなツインテールにしている。

通称ギザミシックル。

年相応の幼さを残しながらも人形のように整った顔立ちから、村ではすでにアイドル扱いされていたりする。

そして教官と呼ばれた壮年の男性が、優秀なハンターの育成を目的に作られた訓練所の教官である。（そのまんま）

教官は教官であるとともにベテランのハンターでもあり、その過酷さから三十過ぎれば引退と言われるハンター業を三十五才となった今でも続けている。

確かにその屈強な体にはいささかの衰えも見受けられない。

ただ目の前の将来有望な自分の教え子には頭があがらなかったりもする。

「で、では試験の内容だが……」

「教官!!」

教官が己が教え子の様子に、この子ハンターにしちゃって本当に大丈夫かな……とかいささか失礼なことを思いながらも気を取り直し、試験内容を告げようとした時だった。

ひどく慌てた様子で部屋に飛び込んできた一人の青年から、驚くべき情報がもたらされたのは。

「緊急依頼です！ シュレイド城にて祖龍が確認されました！
現在はずでに移動したとの事ですが、至急調査に向かってほしいとのことです!!」

「なんだと!?! 分かった、すぐに向かう!!」

教官は思わず叫び、準備のために駆け出そうとする。

そのとき、前へ向かう運動を阻む力に気づかず思い切りつんのめる。

「なん……!?!」

ありえないほど瞳を輝かせたナナが服のはしをガッチリ掴んでいる。

「……」

ナナは純粹さ百パーセントみたいなクリッとした大きな蒼い瞳で教官を見つめる。

後日談になるが、教官は同僚にアイツの瞳からはなんか出てると語ったそうだ。

「……はあ、分かった。おまえも来い。無事こなして帰ってこれたら、行程終了証書をやろう」

眼は口ほどに物を言うが、時として口よりも物を言う。

教官は無言の圧力に屈した。

つまりは依頼をこなして帰ってきたときこそ、ナナがれっきとしたハンターになる瞬間であるということ。

「了解なのです。頑張りますです!!」

ナナはそう言って、アイテムボックスと呼ばれる、ハンターにとって命綱になる装備や道具を納めた物入れのある部屋に駆けていった。

教官はそんなナナを苦笑いしながら追いかける。

十分後、二人は夏でもまばらに雪の残るポッケ村の出口にいた。

ナナはチェインシリーズと呼ばれる、初心者がまず身につける動きやすさを重視した防具に、ツインダガーという鉄製の双剣を腰に差している。

対する教官はクロオビシリーズという、偉大なハンターに贈られる強固な防具に身を包み、その背にはクロオビブレイドというバカげた大きさを誇り、その見た目に恥じぬ攻撃力を秘める大剣を背負って。

互いに準備に不備がないことを確認しあうと、二人はいよいよシユレイド城へと向かった。

第二話―ある日のポケ村―（後書き）

はい、二話です。くどいほどに説明ばかりですね。面白くないですね。でもこれすつとばしちゃうと意味不明なお話になっちゃうんで、なんとか削り削り書き上げました。えー、結果として最初書いた文の半分ほどになりました。（笑）もしこの説明、または描写がなくて意味分からん！なんてことあったら作者までご一報を。……誰か面白く効率的に説明文を書く方法おしえてください、マジで。ってなわけで作者こと景仰の独り言でした。ではまた次話で。

第三話―決意の日、揺れる夜―

「……どこやねん、ここは」

覚醒したヨウの目に入ってきたのは、木目の美しい天井だった。

どうやら何かの建物のベッドに寝かされているらしい。

意識を失う前にいたのは何かの廃墟だったはず。ふと気づく度に場所が様変わりすること、あたりを見回したヨウはげんなりした。

「ほ、目覚めたようじゃの」

「ほんでまたこのパターンかい……」

話しかけてきたのは、枕元にいた見知らぬ老婆。

気づいたら見知らぬ場所で、知らない人に声をかけられる。繰り返される自らの境遇に、ヨウは疲れのにじむ声をあげた。

体調の具合についていくつかやりとりしたあと、頃は良しと見たのか老婆は質問の類を変えた。

「さて、寝起きで悪いがハンター殿。少し聞きたいことがあるんじゃないの」

「……ハンター？」

ヨウは聞き慣れない単語に疑問の声をあげる。

「おや、違うのかい？ シュレイド城で倒れていたと聞いたんだがね、あんな危険地域に踏み込むのはハンターくらいじゃよ？」

「シュレイド城……ああ、あの廃墟な」

言われたヨウは、そういえばあの廃墟は城に見えなくもないと思いついた。

「ちゃうちゃう。そのハンターってのが何か知らんけど、俺はなんや変なガキにあそこに連れ去られたんや」

言いながらヨウは、いい歳して子供に連れ去られた自分に情けなさを覚えて頭を抱えた。

だからヨウの言葉に老婆が顔色を変えたことにも気づかなかった。

「子供？ それはどんな子じゃった？」

問われたヨウは、記憶をたどりながら言葉にしていく。

「なんや白いのと赤いのと黒いのと……小難しい言葉使いする可愛げないガキや。あと……なんやつけ。たぶん祖なる者？ とか言うてたっばい」

「祖なる者じゃと!？」

突然大きな声をあげた老婆に、ヨウは驚いて目を見開く。

「ほ、他には何か言うておらなんだか？」

事情は知らないが、老婆のひどく狼狽した様子に、ヨウも真剣になる。

「他には……助けてくれ言うてたな。あと待ってるとか言われた気もするわ」

「待っている……。そうか、そう言っておったのか……」

伝説が蘇るといふのか、ともはや独り言に近い呟きを残してなにやら物思いにふけりだした老婆に、ヨウは我慢できずにある質問をした。

「なあ、ここどこなん？」

シュレイド城で拾った人物が目を覚ました。

そう聞いたナナと教官は急いで彼を寝かせている村長の家へと向かった。

その道すがら、二人はその時の光景を思いだしながら言葉を交わす。

「ふむ、さすがにシュレイド城で倒れてるのを見たときは最悪を覚悟したが、なんとか回復してくれて何よりだな」

「はいです。本当によかったのです。あ、村長の家が見えたのです」

二人は村長宅にノックも無しに踏み込んだ。

そして、さすがに彼が寝ている部屋のドアはノックしようとした時、中から村長と例の彼らしき声との会話が聞こえてきた。

「嘘やろ……」

「現実を受け止めるも目を背けるもヌシの自由じゃよ。事実がハッキリするまでは皆には伏せておくが、おそろく間違いないじゃろ……ヌシさえよければこの村で過ごせばええ。急いては答えを見失うぞい」

呆然としたような青年の声と深刻さをはらむ村長の声に、ナナと教官は顔を見合わせる。

意を決して教官がドアをノックし、入室の許可を請うと思いのほか軽く了承がおりる。

「失礼しますぞ」

はたしてそこにはベッドから半身を起こした例の青年と、村長がいた。

「村長、彼の具合はいかがですか？」

「悪くはないようじゃ。ほれ、この二人がヌシを助けたハンターじゃ」

村長に命の恩人を紹介されたヨウは、ベッドから降りて素直に頭を下げた。

「どーもえらい世話んなくてもすんません。おかげで命拾いしましたわ。自分は明石遥いいます、ヨウって呼んだってくださいな」

「いや、大事なくて何よりだ。私はハンター兼ハンター訓練所教官だ。気安く教官と呼んでくれていいぞ」

「私は新米ハンターのナナといいますです。これからよろしくなのです！」

ついさっきまるで絶望に塗りつぶされたような声をあげたヨウが、笑顔で挨拶してきたことに教官は違和感を覚えた。

しかし今はそれを聞くべきではないような気がしたので、ヨウを注意深く観察するにとどめる。

「ナナちゃん十五才でハンターなん？　すごいなあ、頑張ってるんやなあ」

「えへへ、ありがとうございますですう。　ナナはたくさんの人を護れるハンターになるんですう！」

ナナの頭をなでながら穏やかに笑うヨウを見て、それでも教官はさきほど感じた違和感をぬぐえなかった。

結果的に盗み聞きのような形で聞いた村長とヨウの会話と、その時の声色からは想像できないヨウの不自然なほどに爽やかな態度から、彼が何か重大な事を隠しているのは明白だった。

「教官さん、どないしたん？　そない難しい顔して」

「あ、ああ。すまん、少し考え事だ」

ヨウは首を傾げるだけでそれ以上の追求はしなかった。

どうやら考える事に夢中になりすぎて、無意識の内にしかめ面になっていたらしい。

表情を意識的に和らげ、村長を見やる。

しかし村長は黙って首を振るだけだった。

教官は今自分が望む答えが得られそうにないことを悟り、考えることをやめた。それは逆に、時がきたら村長が話してくれるだろうという信頼の裏返しでもある。

ヨウとナナの会話が一段落ついたところに、村長から提案が入る。

「さて、ヨウ。ヌシはこれからどうするんじや？ この村に根をおろすにしても、ワシも住居は提供できても養うことはさすがに出来んぞい」

「あー……まあ今の俺なんも分からん状態やしなあ。ここに置いてもらえるとありがたいんやけど、俺でも出来る職とかある？」

現実的な話にヨウも苦笑いをして答える。

だから、ヨウに興味をもった教官は即座に提案した。

「特にしたいことが無いのなら、ハンターになってみてはどうだ？」

教官の言葉に、村長からハンターとはどんな存在かを聞いていたヨウは自信なさげな表情を浮かべる。

「俺がハンター？ ……なんか今いちピンとこんなあ」

あまり乗り気でない様子のヨウに教官は次の言葉を続けようとしたが、思わぬ援護があった。

「ワシはその案に賛成じゃな。ハンターなら生活に困ることはないし、何よりヌシの求める答えへの一番の近道ともなるじゃろう。常に危険と隣り合わせの生活にもなるから、そう簡単には決められんじゃろうがな」

「……………」

村長とヨウの二人だけに通ずる会話だった。それに気づいた教官は意図的に黙っていたが、ナナは頭からハテナをとばしまくっていて口を挟む余裕がない。

しばらくうつむいて何かを考えている風だったヨウだが、ふいに顔をあげる。

その双眸に宿るのは、揺るぎない決意。

「ま、他に選択肢はなさそうやしな。どうなるかはやってみな分からんけど、あるかも分からん機会をジッと待つゆうのは性に合わんわ」

ヨウはそう言って儂く笑った。まるで、小さな小さな希望にすぎるかのように。

しかしそれは、まぎれもなくハンターとして生きるという意味表示に他なら無い。

「では村長、ヨウの訓練は私が引き受けても？」

「無論。頼むぞい」

村長と教官は互いに思うところがありながらも、それだけを述べ

るにとどまった。

「ヨウさんもハンターになるですか？ それなら私と仲間なので
すね！ 一緒に頑張って行きましようなのですよ！」

一人、なにも分かっていないナナが純粋な笑顔を浮かべた。

「訓練はヌシの体調も考えると来週くらいになるかの。まずは
ゆっくり休んで万全の状態に……」

「いや、明日からでええ。むしろ休みすぎて身体重いくらいや」

ヨウが訓練を受けるにあたって、細かな取り決めをしようとした
村長は本人の申し出に驚く。

「訓練とはいえ生半可ではないんじゃないぞ？」

その言葉に、ヨウはイヤソーな顔を隠そうとしなかった。

「本来捕食者側の化けモン狩ろうっちゅーんや。そんなんイヤで
も分かるわ」

覚悟の上だ。

言外にそんなセリフが聞こえてきそうなヨウの言葉に、それまで黙って話を聞いていた教官が大きくうなずいた。

「分かった。訓練は明日からだ。朝に迎えに行くから今日はきっちり休んでおけよ」

そう言い残し、教官は大股で部屋を出た。

ナナも最後に、ファイトですう、とポーズ付きの激励を残して教官の後を追う。

二人だけが残った部屋に、わずかな静寂がおとずれた。

「まったく、無茶を言いおって……」

村長は大きなため息とともに言葉を吐きだした。

「しゃーないやろ。ズルズル引き延ばして事態が好転するんやったら俺もそうするけどなあ」

そう言って諦めたように苦笑するヨウに、村長は再度ため息をつく。

「ついといで。ヌシの家に案内しよう」

「なにからなにまですんませんなあ。……オバア、おおきにな」

「バカな子だよ、全く」

ポツケ村に新たな仲間が増えた日。

陽はとうに沈み誰もが寝静まった深い宵闇に、新しい主を得た家の中、ゆらゆら揺れる燭台の火の灯りのみを頼りに窓辺にたたずむ人影があった。

「異世界、てか……。冗談、キツいわ……。――」

ぽつりと漏れた呟きを聞いたのは、天に輝く星月だけだった。

第三話―決意の日、揺れる夜―（後書き）

どうも景仰です。第三話ですね。一言いいですか？説明なっげー！書いてる方もおもないねん！ワシはもっところ血沸き肉躍るようなアクション戦闘シーンとか、腹抱えて笑える掛け合いのシーンとか、読んただけで全身がカユくなるよーなラブシーン書きたいんじゃー！すいません、取り乱しました。あまりに思うように進まなくて……初っぱなからこんな暗くなる予定じゃなかったのになあ。どこで間違えたのかなあ。プロット？何ソレおいしいの？ではまた次話でお会いしましょうっ！

第四話―ビビる男と勇む少女―

「なあ、俺たち、まだ早いと思うねん。こーゆう大事なことはもつとゆっくりするべきやろ？」

「そんな事はないのです。ヨウさんは私がどれだけこの日を待ち望んでいたか分かってくれませんか？」

「ああ、泣かんとってや。どっちに転んでも俺が悪者になつてまうやん」

「じゃあ……私とイッてくれるですか？」

「それは……あつ、アカンてナナちゃん！ そんなことしたら……あぁっ」

「何やっとなるんだアイツらは」

「よいよい、若さよのう……」

これでもかと言うほど呆れのにじむ教官のつぶやきに、村長の合
いの手が入る。

二人の視線の先にはチェーンシリーズという、これまでに多くの
新米ハンターの命を救ってきた防具に身を包む、若き少年少女の姿
があった。

ヨウがポツケ村に来て三ヶ月、季節は移り秋を迎えていた。

寒冷地にあるポツケ村にとって、秋などあって無きに等しく、す
ぐさま冬を迎えるのだが。

ともあれ、ヨウは三ヶ月に及ぶ厳しい訓練を乗り越えてハンターとしての資格を得ていた。

なお、ナナは三ヶ月前の時点でハンターとしての資格はあったが、教官の――

「どうせ若いハンターが近い時期に二人も誕生するんだ。ヨウの訓練が終わってから、二人でクエストを受けるといい。安全性も確実性も段違いだ」

とのありがたい言葉により、今日までおあずけを食ったのだ。

つまり今日が、ナナとヨウの記念すべきハンターデビューの日となる。

「ヨウさん、ここがクエストを受けるギルドなのです。ギルドで依頼、つまりクエストを受けて指定のモンスターを狩るのがハンターのお仕事なのです」

「うっ。ナナちゃん？　そこ掴んで引っ張るん勘弁してくれへん？　俺の首が結構えらいことなってるんやけど」

二人はハンターギルドと呼ばれる建物の中にいた。

ギルドの最奥に鎮座する暖炉が煌々と光と熱を送りこみ、そこに
いる人たちを暖かく包み込んでいる。

ギルドはポツケ村にあるどの建物よりも大きく、活気に溢れてい
る。

それはクエストを受注するギルドとしての役割と、仕事終わりの
ハンターの労を癒すために酒場としての顔も持つからだ。

しかし酒場というものがここにしかないため、一般の人たちも多
い。

むしろ一般人とハンターの比率を考えると、一般の人の方がよ
ほど多い。

昼夜を問わず人で溢れかえるギルド内は、時として修羅場と化す
ほどである。

そんな中をナナはやっぱりヨウのチェーンメールの首もとをひっ
掴んだまま、器用に人を避けながらクエストの受注を取り扱うカウ
ンターへ向かう。

「あらナナちゃん。とうとうハンターデビュー？」

カウンターにつくなり声をかけてきたのはギルド嬢と呼ばれる、いわゆる受注事務を担当する女性だ。

「お久しぶりなのですユキさん。この村は私とヨウさんで護りますので、安心してほしいのです」

「あら、それは心強いわね」

ユキと呼ばれたギルド嬢は、ニツコリ笑ってナナに答えた。

その笑顔に、酒場の方で酒を食らっていた数人が鼻血を吹いて卒倒する。

何を隠そうこのユキ、ナナと並ぶポッケの双壁として名を馳せる美人ギルド嬢として有名だ。

笑顔一つであらゆる男を手玉にとるその美貌は、もはや罪。

キリリと整った目鼻立ちに、さらりと流れるロングヘア。

また十八歳という年齢に不釣り合いなほど、ほっそりしていながら出るところは出てるスタイルの良さが拍車をかける。

ナナを可愛さのアイドルとするなら、ユキは綺麗さのアイドルという立ち位置にある。

「ところで、そちらの方も紹介してくれるかしら？」

ユキの興味がナナからヨウに移る。

「はい、こちらが今言ったヨウさんなのです。私と同じ新米ハンターさんなのです」

「どーも」

ギルド内の様子に眼を走らせていたヨウは、話が自分に向いていることに気づき軽く頭をさげる。

「はじめまして。あなた結構有名よ？ ポッケの幽霊って」

「は？」

ヨウは訳が分からないといった顔をする。

事の顛末は三ヶ月前にさかのぼる。

それまで怠惰な学生として平和を享受していたヨウにとって、ハ

ンターとしての訓練は過酷を極めた。

朝をつげる鳥の鳴き声より早くに訓練場に向かい、ボロ切れのようになつて帰宅し即、泥のように眠る。

余裕がなくて村人への挨拶を後回しにしたため、毎夜ボロ切れが村中をうろついているとの噂が流れ、娯楽に餓えた村人たちはそれを幽霊として騒ぎに騒いだのだ。

あの壮絶な訓練をネタにされたと知ったヨウは少し複雑な気持ちになり、苦笑して頭をかいた。

「まあ余裕なかったとはいえ挨拶を後回しにした俺も悪いわな。嫌われるよかよっぽどええわ」

ヨウはいつのまにかナナの手から抜け出し、カウンターの椅子に足を組んで座っていた。

「殊勝な心がけね。あなた、嫌いじゃないわ」

ユキはそう言ってヨウに極上の笑顔を向ける。

ヨウの背後にいた数人の中堅ハンターたちが鼻血を吹いて倒れる。その中に女性ハンターも混じっているのはいかなものだろうか。

「コントか」

「なにか言った？」

「いや、なんも」

ヨウのつぶやきはユキには届かなかったようである。

「ほら、しゃべってばかりいないでさっさとクエスト受注せんか。
後がつかえてるぞ」

ギルドの入り口あたりで二人を見守っていた教官が、しびれを切らして二人に声をかける。

なるほど確かにヨウとナナの後ろには長蛇の列が出来ている。

……倒れた人間によって。言うまでもなく、先ほどユキの笑顔に一掃されたハンターたちだ。

「いやだから俺はまだほら、準備不足っていうか心の準備とか、
ってか明日からでいんじゃない？」

二人の美少女と己の師匠の前でボロボロと情けない言葉をこぼすヨウ。

ちなみに村長は酔っぱらった村人に絡まれ、とつくの昔に御輿よろしく担ぎ上げられ連れ去られている。

「じゃあこのガノトトスのでお願いしますですーあ、人数は二人で」

「待ったれや嬢ちゃん」

ナナはヨウの言葉など無いものごとく華麗にスルーして、めばしい依頼を受注しようとする。

が、さすがにそれにはストップをかけるヨウ。

スルーされたことではなく、ナナが受けようとしているクエストに問題があった。

ガノトトスとは主に水中に生息する魚竜種と呼ばれる飛竜の一種である。

その大きさはハンターが最大の相手にして最も相手にすることの多い飛竜の中でも群を抜き、記録によれば三十メートルに届こうかという超巨大種も確認されている。

記録上最も小さいのでも二十メートル弱である。

魚竜と呼ばれ水中を主な生活場所とはしているが、地上での行動も苦にせずその巨体を生かした攻撃の数々は見た目通り、もしくはそれ以上の威力を誇る。

歴戦のハンターが自らの戦歴を誇らしく主張する強固な装備に身を固め、豊富な経験を生かして相対しても一撃で昇天することは珍しくない。

チェーンシリーズなど、何の屁のツツパリにもならないだろう。

ましてやクエスト初挑戦のペーペー、勝てる要素など一つもない。

「最初はドスギアノスとかから行ったほうがええと思うねん。誰も最初っから強いわけやあらへん。一つ一つ階段上るように経験積んでかな、死んだらそれまでやねんで？」

ヨウは必死でナナを説得した。

その甲斐あって、ナナは雪山に縄張りを張るドスギアノス討伐のクエストを受けることを了承した。

「ヨウさんがやっとヤル気になってくれて嬉しいのです」

意気揚々と受注書を受け取ったナナを見て、ヨウはあることに気づいた。

「しもた！　なんか自らクエスト受け入れた結果に！？」

「まだ言ってたのか？」

すかさず教官の呆れ声かとぶ。

「さあヨウさん、私たちの晴れの舞台なのです。張り切って行くですよ！！！」

とっさに逃げようとしたヨウの、やっぱり首元をひっ掴んだナナはそのままズルズル引きずりながらギルド専用クエスト出入り口に向かった。

「いざ！　なのです！」

「俺はまだ認めてへん！　納得してへんで！！　イヤーーーーあああ………」

ギルド内にこだましたヨウの悲鳴に、教官とユキは顔を見合わせ

て笑った。

第四話―ビビる男と勇む少女―（後書き）

どーも景仰です。はい、第四話ですね。説明地獄から抜け出せません。切実に誰か救いの手をプリーズ。それもこれも本作メインヒロインのナナさんのせいだ。別名プロットブレイカー。どーせ下書きだしと、キワモノキャラにしたれーもけけけけー、なんて思ったのが大間違い。……保存しちゃった。修正？何ソレおいしいの？投稿したれ。もう後戻りはできねーぜ！結果、大幅にプロットを書き換えることに……。現在プロットの修正と執筆を同時進行という地獄にハマった筆者です。ではまた次話でお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0427h/>

自由への招待

2010年10月22日00時03分発行